百人一首新抄

へ4
3770

門号 利4 3770 巻

百人一首新抄

大正七年三月八日寄
室井平蔵氏贈

蓼洋舎文庫内

百人一首

天智天皇

秋の田の仮庵の苫を荒み　我が衣は露に濡れつつ

百人一首抄

持統天皇　新古七夏

春すぎて夏来にけらしらしらたへの衣ほすてふあまの香久山

たへとは、楮布の類をいふ　あまの香久山　天のかぐ山　一首の意は、春もすでに夏になりたりとおぼしきころ、白たへの衣をかけしたりとみゆるなり

柿本人麿　拾遺哀二

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかもねむ

山の枝頭をへて枝頭にうつるまでのかずをいふ　山鳥の尾のしだり尾のながながしとは、夜をかけてなげくこころをいふなり

山鳥の尾はながき中すゑもそり尾にすべて尾のながきをいふ　しだり尾とは、尾をさげたるをいふ　ながながしとは、夜をかけてなげくこころをいふなり　ひとりかもねむとは、ひとりねるをいふ　一首の意は、山鳥の尾のしだり尾のながながしとは、夜をかけてなげくこころをいふなり

山邊赤人　新古七冬

田子の浦にうちいでて見れば白たへの富士の高嶺に雪は降りつつ

田子の浦は、駿河国の海辺なり　富士の高嶺は、駿河国の山なり　一首の意は、田子の浦にうちいでて見れば、白たへの富士の高嶺に雪は降りつつなりとなり　三句の白たへは、雪の白たへをいふなり　降りつつは、降りつづくなり

哥ハふかく清し（此つゞきハおもしろき 是れ之次いふ）一首の意ハ夜べのやどり
から田子のうらへ立出てみれバふじの高ねに雪ッ白にふりけ
るとなり 新古今集にハ（田子ハよるへ田子の浦より打歩きと八海の西へ永むきに出）
せしを 打出てみれバ白妙のふじの高ねに雪ハふりつゝるや
けるとあり

猿丸大夫　古今秋上　是貞のみこの家の哥合のうた
奥山に（おくハその字）紅葉ふみわけ（鹿がふみわくなり）なく鹿の
こゑきく時ぞ（その字力ありかく見るを息ての事）秋ハかなしき　一首の
意ハ秋となりてハいろ／＼の哀なる事どもハあれどそれを
見るにしもせしに奥山にて紅葉をふみわけてなく鹿の
声きく時ぞまさりてかなしくおぼゆると也 言の外のおもむきハ
その字も聞きこゆる也 古今集にてハよみ人しらずとの部也

中納言家持　新古今冬　題しらず
かさゝぎのわたせる橋に（二ツの星の会合に鵲が羽をならべて天の川をわたすといふ橋）をく霜の（めの字ハ冬なり）
白きを見れバ夜ぞふけにける　一首の
心を此歌の心をめでたき説どもハ皆多くあれども或人
いはく上二句ハひろく天の川を指していふとみるべし 一首の意
ハ天の川などすさまじき火の霜の白きなりき月のみちたると
これぞもしや夜がふけたるとしあるべき満天に
清くまさるなど同じくきこえて霜の白くべく寒くすさまじき

夕しきれ霜をみちしころをいふ大空の果まで鵲の橋といひ
霜の置べきもしきは志らきといへるがすさまじきなり
いへるが一首の趣向にてさえ〳〵としたる景気殿契沖が説也
今すみしみさるへ之世説りやすまし作いふわしむ

安倍仲麿

古今羇旅
此哥ハもろこしにて月を見てよみける左注
仲麿ハむかしもろこしにかよはし
学問させにつかはしたりけるにあまたの年を経てえ
まかりて後に帰りけるを此国より又使
まかりいたりけるにたぐひてまうで来なん
とてゐてまかりけるに明州といふ所の海べにて

かの国の人馬のはなむけしけり夜になりて月のいとおもしろくさし出たりけるを見てよめるとなむかたりつたふる

天の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に 出し月かも

天の原ハ大空のこと也ふりさけみれば八遙に見やる心也春日ハ三笠山ある所の名春日の三笠山ハ名所也

一首の心ハ大空をふりさけみれば海の中より月が出る此月ハ春日なる三笠山に出たる其月も同じ月なり
とて大和の三笠山を思ひやりてよめる明州ハもろこしの海辺なり

右のさまうれども月までもおもしろくぬからまでめづらしき趣也

喜撰法師　古今　雑下　題しらず

わが庵ハ都のたつミ（宇治ハ京より辰巳の方なり）しかぞすむ（みやこはてきすむ）

世をうぢ山と（世の中をうきとといひかけり）人ハいふなり　一首の

心ハ我庵ハ都の辰巳の宇治山にて名をしらに隠遁してすみたり世

の中に何もうき事ハなきをうき世ぞとて人ハいふぞとい

へるなるべし又我庵ハ都の辰巳の宇治山に心しづかに引こもりて住

でをるを世の中を憂きことありて隠遁したと人ハいふぞと

よめるともあるべし詞つゞきハおのづからたしかならずハ定かならし古と

序に此人の哥を判して始をつゝけたしかならずといへるもさもありや

小野小町　古今　春下　題しらず

花の色ハ（花の色とさかりをいふ此一首ハ花の盛よりうつるによせてこなたの老衰せしをなげきたるなり）うつ

りにけりな（うつりハうつろふとおなじことなり）いたづらに（いたづらハ嘆息の詞にてなげかしき事につきて心に切なる時いたづらにさとつくる詞也）

今もうつりしいたづらにしたづらにとなどいふなりこれとこゝろ同なり

我身世にふる（世の中にふるしなりとして年をふる）ながめ（眺ハ詠めの詞　しかの方ならぬ詞）せしまに　一首の心ハ

てをる事に俗にもうつとらしてをるといふ所をきましみて長夏とよめり

秋のひでもなくむなしく年月をすてきてうつりしてふる

うちに花の色うつろひおとろへたとなげきとおなじく

きゝし趣なり三四五一二とつゞきけり　雑歌花ハ一首のしらてまて趣きこゝ

述懐之古今集に春の部に入しになりて落花をおりし

こゝハ強説なり

蝉丸　後撰雑一　相坂の関に庵室をつくりて住侍りけるに行かふ人を見て

これやこの　これやこのとハ此世のこれといふ人をいふ也ありとハ実をといふこゝろ　逢坂ハ入る所なり

ゆくもかへるも　行とハ逢坂の関をこゆる也　帰るとハ都へかへるをいふ　白とハ別の心

わかれては　別れてハ逢坂の関にて行人かへる人のわかるゝ也

しるもしらぬも　知るもしらぬもハ知たる人も知らぬ人もわかるゝ也　行人もかへる人もといふ心也

あふさかの関　逢坂の関ハ別の名也　一首の心ハ都へのぼる人も又東へ下る人も実ハ相坂の関にてわかれ又しられぬ人も逢ふハ世のことわりなるに逢坂の関の名を　ゆきかふ人を見て我身のうへをおもひしる心なるべし

其の歌のこゝろハこれやこの字にあり

参議篁　古今羇旅　隠岐国に流されける時に舟に乗りて出立つとて京なる人のもとへつかはしける

わたのはら　わたの原とハ海の事也

八十嶋かけて　八十嶋ハ数しらぬ嶋をいふ　かけてハこぎ出てと也

こぎ出ぬと　海の上を京へかへらんことのむつかしき事を思ひてこぎ出ぬといふ也

人にはつげよ　京に在る人に告よ

あまのつり舟　流罪の身なれバ告べき人もなきまゝに海士のつり舟に言伝する也　一首の心ハ沼もなく広くしてはてしなき海をいづくともなく遠く流されて行も京の我家の人に告てくれよ海士の釣舟よと也

僧正遍昭　古今雑上　五節の舞姫を見てよめる　十一月の豊明の

いひて殿下の酒宴をとのふる儀式あり是を因みに五節の舞といひて五つ四月なとよお
よき女を先つよ装束して舞らしむ女ともれまふを殿下まてせのまふ舞ひあり
天武天皇吉野にましまし時琴を弾し給ふに天女くだりて衣の袖をひるかへしけ
る事あり是より五節のはじめ也此舞は舞姫を天人にしてまふ心をよミけるや

天津風 つ八休字にて是ハ天つ風也天つ空八雲ふかくせなり 雲のかよひ路 天へのぼりかよふ雲の中の道をいふ ふきとぢよ 吹閉よとなり をとめの姿 天女舞姫を云 しばしとどめむ

一首の意ハたゞふく風よ雲のかよひ路を吹とぢて天へかへる路をとぢよせめて天女のごとき舞姫をしばしとゞめて見むとよめり此舞を天女に見たて古今集に良岑宗貞とあり是ハ俗にありし時の名也

陽成院 後撰 恋三 筑波嶺の みねより 光孝天皇の女綏子内親王釣殿の御子と申せしをなほし給ふ時の御歌也
みことのり八男女の人をさしていへり
歎天をさして申し

筑波嶺 常陸の国つくばの郡にある山也男女川もおなじ所也 峰よりおつる みなの川 此川ハ筑波ねの峰より落る也 恋ぞつもりて 淵となりぬる 淵とハ水の深き所をいふ

一首の意ハつくば山の峰より落る男女川の流ハはじめハ小川なれども流れつもりて深き淵となるごとくはじめハさほどにもなき恋なれども月日つもりて深くなりしとよめる也

河原左大臣 古今 恋四 融公 陸奥の しのぶ 信夫郡 もぢずり 誰ゆゑに
陸奥の信夫郡より出る布をもぢずりといふ其布の模様を乱してすれるなるべし此の名乱しにかへて此二句ハ序也乱れそめにしといはむとてなり此歌ハ恋の心を忍ぶ心のみだるゝを誰ゆゑと思へとの世に我をかくるにやといふ心也小倉諸本にミだれそめにし 我ならなくに 乱そめにしとハわれならぬ人をさしていふなり
はじめし [illegible] 乱そめにしを一首

のこの八十の人ゆゑよ心を尤しるべきわざとそれらもみだれ
そめられそれよりのちよりのちまでもつかへてをしまれ
ましかばなほ千とせもかぎりなくまもりつかへんとおもふ
人をおもひて孰をこそ思ひ知るべきかはりなくまもりつかへ
まつりつかへまつりし

光孝天皇　拾遺今上

君がため春の野に出て若菜つむわが衣手に雪は降りつつ

君がためを人をわがためとなのりたる歌

春の野に出て若菜つむ　一首の意をかりて若菜をしぼりて我衣手に
雪は降りつつ　若菜とつまれてそれ程なる雪の中にて若菜をつむ
とあらんにはなどか我袖は雪に降りつつ

中納言行平　拾遺雜下

立わかれいなばの山の峰に生ふる松としきけばいまかへりこん

立わかれとは別るるなり　いなばの山は因幡にある山なり　峰に生ふる松とは
こしらへ物とは人体なり　きけばとは聞くなり　今かへりこんとは
立ちてこの因幡へゆくなり　一首の意
でありけり

在原業平朝臣　拾遺雜下

千早ぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは

千早ぶるは天の枕詞なり　神代もきかずは天の岩戸の事なり　竜田川は
山の名なり　からくれなゐに水くくるとは紅葉の事なり　竜田川
の紅葉を水くくるとは

ちはやふる神代もきかす竜田川からくれなゐに水くゝるとは

世にもめづらしきを…唐といふは唐より渡りし物の名なれば…からくれなゐとは唐衣唐錦などいふがごとし世にめづらかなる物をいふ…絞布をくゝりて染る也…白きをとゞむる…しぼり染といふ也 水をくゝりて染たるやうに見ゆるをいふ

しぼり染にする事也

一首の心は神代のさま／＼ふしぎなる事ありしかどもその神代にも竜田川の水をくれなゐにくゝりたるといふ事はきかずと及ばぬ事ぞとて紅葉のちりしく流るゝを纐纈にいひなしたる也

藤原敏行朝臣

住の江のきしによる波よるさへや夢のかよひ路人めよくらむ

よるとは寄る事をいひてよるとは夜の事也 夢のかよひ路とは女のもとへかよふ夢の中の道なり さへやとは次の句へかゝる詞也

一首の心はかくしのびて…女のもとへかよふ夢のかよひ路にさへ人めをよけてかよふ事…

みずの夢なれど秋の夢のうちにかよふにさへ人めをよくる事なん浅ましき中ぞとえ人めしげくして逢がたき中にて夢にても人めを憚るとてわびたる心也

伊勢

難波潟みじかき芦のふしの間もあはでこの世をすぐしてよとや

ふしの間とは短き事をいはんとて芦のふしの間と云へり…

一首の心は…逢はで過してよとやといふ心也

元良親王

わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ

わびぬるとは…事いできて後京極御息所につかはしける

わびぬれば　わびぬるハ思ひわびてあまりにしのびてゐてハの事なり　今はた同じ　同しハ身を
それハ今ハ生てながらへて居るも死ぬるも同じ
あふにはまさるまじき身を
まよはせたる舟を
難波なる　難波にある澪標の事　身をつくしても　澪標ハ船路の
わびぬれバ今ハなにゝか身を頼みて今でハ生てあるかひなく
死ぬるも同じやうなる事なれバ人にあひがたくて身をなくして
もあはんと又ハわれバ思ひに死ぬべきことをふくめて命に絶
て思ひハ死ぬるして死ぬるも本望にて命をうしなふも同じ事命なれハ
身をなきものにしても逢はやと思ふとよみたる也　下

素性法師　俗名　遍昭の子
今来むと　今ハ俗に追付といふに同じ　いひしばかりに長月の　九月　有明の

月を　有明の月を　待いでつるかな　一首の意ハ今来むといひし人ハ
まびしくものゝを使ふまで待てあるまじきに追付といひ
いひておこせたりけるで秋のよも更て長月の有明の月ハ待出しけれ
つひに来ぬ故待ちもなかりしと

文屋康秀　ふんや　古今　縫殿助　是貞のみこの家の歌合のうた
吹からに　俗にふくとすぐにといふ事　秋の草木のしをるれば　風にふかれてしほるゝ
むべ　うけがふ意の詞にて俗に成ほどゝいふ心也　山風を嵐と　あらしとハ荒きをいふ事也
いふらん　一首の意ハ山の嵐がふくとその秋の草木が
成ほどゝ嵐の字ハ山風の二字を合せたり
しほるゝを見てそれで成ほどゝ山風を嵐と書て
世にてあらしといふならんと也

大江千里（おほえのちさと）　是貞のみこの家の歌合によめる

月をみてあれこそかなしけれ　わがのみ秋にあらぬものかは

一首の意月をみてあれこそかなしけれ我のみ秋にあらぬものかは

阿波の姫（あはのひめ）　藤原敏行（ふじわらのとしゆき）　寄雁院（きがんいん）の歌（うた）

秋来（あききぬ）ぬと目にはさやかに見えねども　風の音にぞおどろかれぬる

秋来ぬと目にはさやかに見えねども　風の音にぞおどろかれぬる

秋の来ぬるとは目にはさやかに見えねども　風の音にぞ驚かれぬる

院（いん）の位（くらい）にて帝（みかど）をとり奉（たてまつ）りしかば　位（くらい）を白山（しらやま）の御願（ごがん）ゆゑ　捨（すて）給（たまひ）ぬ　これをぬけがらとして　たむくるかたとは　神の恵（めぐみ）のまことにたのもしく　人（ひと）

三條右大臣（さんでうのうだいじん）　後撰（ごせん）　恋三（こひさん）　女のもとにつかはしける

名にしおはば　逢坂山（あふさかやま）のさねかづら　人にしられでくるよしもがな

名にしおはば　逢坂山のさねかづら　人にしられでくるよしもがな

女（おんな）の家（いへ）もとより　逢坂山（あふさかやま）のさねかづらとよめる歌（うた）の心（こころ）　人（ひと）に二人（ふたり）一（ひと）つ寝（ね）るといふ名（な）あり

こうなら　一首の意　逢坂山のさねかづらのつるのように　人にしられずにくる方法があるならば　人にしられずにくるよしもがな

貞信公（ていしんこう）　拾遺（しゅうい）　雅恋（がれん）　亭子院（ていしいん）の歌（うた）

小倉山（おぐらやま）峰（みね）の紅葉（もみぢ）心（こころ）あらば　今（いま）一（ひと）度（たび）の行幸（みゆき）まつ　と　大井川

貞信公　前代の天子の御ありきを行幸と云　仙洞の御ありきを御幸といふ　同じくいづれもみゆきといふ　ありて行幸もありぬへき所なりとし　天子にもみゆきありて此紅葉を御らんぜらるべき事とおもひ　おほせのよし奏せむとて

をぐら山峰のもみぢ葉心あらば　情がありてもしあらバ　今ひとたびのみゆきまたなむ　行幸まで散らずにまてよかし

なぐさみは俗にみゆきやうし　ふりのうへて情のあかし

一首の意ハ峰のもみぢ葉も心あらバひとしほおもしろく今院の御幸ありて行幸もありぬべき所なりと仰られしそのよしを奏せさせ給ふとて天子も見ませらるへき紅葉なれば今一度の行幸のあるを待あへせてちらぬやうによませられし

中納言兼輔　新古 恋一　女にはじめてつかはしける

みかの原わきて流るゝ　湧てハ流の字也　わき事也　いづみ川　いづみといふ字をさそふ為の序也

いつ見きとてか　俗にいつみて事がありてかく　ふかう恋しう思ふぞなど　恋しかるらむ　一首の意ハまだしく人を見てこそ心にもおもひてわすれぬ事もあるべきなれど我ハいつみたる事で一度も見もせぬ人に何故かくまで恋しき事やらんと也

源宗于朝臣　古今 冬

山里ハ冬ぞさびしさまさりける人めも　人めハ人の来る事也　くさハ草ねをいふ　草もかれぬとおもへば

一首の意山里ハ人ハいよいよ来ず草ハいよいよかるゝ冬ハ猶别さびしさがまさるとの

凡河内躬恒（オホシカフチノミツネ）　古今 秋下　白菊の花をよめる

心あてに　俗にあて推量に　をらばやをらむ　をるならバをらむといふ事也　その数ハやの字にこもる

初春の花盛りとは世の人の春きくの花　一首のこの八句しもが垂て赤紫のこの八字をあらうて素けなるまがハしてこ
もう素とこたわうしねどわて振袖に分わうりよ咲てゐるさかと思ふ
わたくしをうもせらまとうとう
壬生忠峯　古今巻三　俗よ志人がうづまいとう行よ
有明の月にうしなしら交　わうつうきし一つよん拾うます　又をしまの月の
てもたれかうづまいとうしかりて彩わきかうよ咲をしてこ行
月まめをうれをしのうれをきをきをきうれあ
わろきうきうきあ　とうしかり曉をわ
紅わざかうよ又えしわうし女よ列まてを河をこ　一首のこの有明の月が長がのてもまこ
うれいがそもしわいこ曉がとうきの八又をないしか散ふこ

吸上是則　古今巻冬　**大和国**よまうれる河よ吉野川流るとよある
朝ぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里に降る雪　月げとをゆるうぬまこ
以何よ　まで雪結ようぬまこ
わうこ　**よしの里よふまうる雪**　一首のこの八句かめぐ
ようれを有明の月のうげうこ天ゆるうぬ吉野の作こよ雪がかりこ

春道列樹　古今巻下　**志賀山越**よてよある
山がハよ風ふうれうこ志賀山越よてよ
吹散なわ花　一首のこの八風が山川よをうげこをけこを志賀山越
いかを吹散がれびここ数てなれてもこ天なれをふぜひこ
この散ようつてをるがするこをちぶみをこ

紀友則　古今巻下　**ひさかたの光のどけ**
春の日に花のちるとよある

久方の　松が枝ごとに天の雲とぞ見まがふ花の白雪　俗よりつくりたるこゝろ
心とどき　俗よりつくりたるこゝろ　わろく受たるをこゝろ
たくさん俗は乱世にて　花のちるらむ　一首のこゝろは日は長し風
ふかぬそのうき世にうらやましきこゝろ　ちる事やんとも

度辰眞風　古今　新古　影しら波

誰をかも　ちる人と波立の事かなと　高砂の松
も　高砂は山の事と今の世の所なり　むかしの友　俗よむかしなじみ
むかしの名残　ちのよりはなれぬもの　なつかし
なつかし　一首のこゝろは誰と友らまして夫とせう同年ごろの人は
ちりぬるに今は世で久しいねむふの山に松たれもそれも我生

年ごろ尽てなきてはよ生きとのでむかしなじみとふでもないこゝろ

紀貫之　古今　巻上　初瀬よまうでしたる時人の
家よりはつかしくさくらをこゝろ　はつかしくさくらをこゝろ
うたがるわるしかくさくらをこゝろ　はつかしくさくらをこゝろ
やどりは家をあるとは　はつかしくさくらをこゝろ　はつかしくさくらをこゝろ
しき事もなきまゝ久しくやどりをしたるもなくまきしはしき
不遠てとかの家をやどりまつりしくふるはは山高はは行のまきしは
はつかしそうなる　生てあり　梅の花をたりてよめる
人は　あるしいは　俗よりとりてあるこゝろ　心もしらず　人のこゝろをしらぬこゝろ
とは詞はなれども下の花でむかしの
なるよ白てあるその字よりきこゆる
まゝ人とその色の　白ひまし　古今集　一首のこゝろは心をかなりしやうしやや

はるのうちをもてはやしし梅の花がむかしは過ぎるよ思ふのでなほ昔
の面影をいふ事はいふまでもなし

清原深養父　古今夏

夏の夜はまだよひなりつるかと思ふ
雲のいづくに月やどるらん　一首は夏の夜はまだ宵で
雲はいづくよりか月やどるらんと有まいが雲はどこにあるか
月がどこへ入るかと有まいが雲はどこにあるか
月をもいふ雲より月をもいふ雲はの縁き事を言なり
月をもいふ雲より月をもいふ雲はの縁き事を言なり

文屋朝康　後撰雜中

白露に風の吹しく秋の野は
つらぬきとめぬ玉もなしけり　白露は糸を白玉をいつらぬきとめて
つらぬきとめぬ玉もなしけり　白露は糸を白玉をいつらぬきとめて
風が吹しくと秋の野は糸をつらぬきとめぬ玉もなしけり
風が吹しくと秋の野は糸をつらぬきとめぬ玉もなしけり

右近　拾遺恋四

わすらるる身をば思はず誓てし
人の命の惜しくもあるかな　一首は我を忘れる身をば思はず
人の命の惜しくもあるかな　一首は我を忘れる身をば思はず
誓てし人の命の惜しくもあるかな

恭議等　後撰恋一

あきぬべし今はかぎりの命にて
逢て見ぬ人の命ぞ惜しき　逢て見ぬ人の命ぞ惜しき

浅茅生の小野の篠原 しのとハ調をとゝのへむためなり是迄二句序也 忍ぶれど くつみなく
浅茅生えて小野のしの原つゝむ事としてよミつゞけしなり
みなぜに此句まで
ゆふ意なり
あまりて 忍ぶにあまりて かくしかねて なとかくの 人の恋しき
一首の意 恋をする事を人に包みつゝめどもつゝみかねて人の目に立ても大事なりつゝまんとすれども つゝみかねて人の目にあらハるゝハなぜに又かやうに人が恋しいのじやとなり

平兼盛 拾遺 恋一 天暦御時哥合
忍ぶれど 包むといへども 色に出にけり 我恋は 物や思ふと人の問ふまで 人がとふほどに
一首の意ハ我ハ恋しいのをつゝみかくすれども恋しきがあまりて何ぞ物思ひをするかと人がとふ程に色にあらハれたとなり 三一にあたりと

壬生忠見 拾遺 恋一 天暦御時哥合
恋すてふ 恋をすると 我名ハまだき 早くも 立にけり 人知れずこそ 思ひそめしか
おもふ人に逢ふまでにいひもだしもせずに也
一首の意ハ我恋をするといふ名がはやく立しまふた世上の人ハいかにしてしりけるにやとなり 人にハしらせもせぬのに何と思ひそめたとなり

清原元輔 後拾遺 恋四
契りきな 約束したる事 かたみに袖を 互に袖をしぼりつゝ 涙にぬれ しぼりつゝ 末の松山浪こさじとは
一首の意ハ女に人をかへりてかたみに袖をしぼりつゝ契りし事ハ末の松山を波もこえたとなるといへりあの松山を浪のこさぬやうにかたく約束せしことを今さらかハりけるなり
一首の意ハさかひに袖をしぼりながら

ホトトギス松山ハ波がよるとも見まいこゝろ浦りハ心づくしの秋の夜ハ

ゆめとあつさ哉ト

中納言敦忠　拾遺 恋二　題しらず

あひ見てのちの心にくらべハ

むかしハものを思ハざりけり

一さとハ逢さ哉こゝろ

ものをもうしなうてこゝろ

をあらぬもの思ひをしてそ

ねむりよりてハ見てハ

ゆめとなりとそ

中納言朝忠　拾遺 恋二　人麿ハ河内介なり

あふことのたえてしなくハ

中〻ハ人ハ恋しき

ものとしらまし

一首のこゝろハ稀

くらゐ尊ケれども人をとゝ

するぞ〻しく〻一度もあ

ないとなりひあきらめて人をとゝ身をもうしなうてさうとゝ

恋しさうしさにはまりそ俗ようて酒とふ

藤原公　拾遺 恋二

よ　又ともあるとねをこゝろ

いふとらして信濃よりふるとも

あるとまとと

あるとまとハ喪恋

ハレと大息ハくるゝ

するとちられさの大息と体の

ものとしらまし

恋さ人をなりかえ次

俗ハ信よ

むさぼなりといふことなれば
死ハむさぼる死の事なり

なりぬべきこの世なる　一首は八十あまりの女が
つれなきを恨みて死なんとぶたん人死でもアハヤうとゆ
ゆ若死をしたりいふて名ある人のおもひあまりなり　うらいふ意
死なんとせし
恨ぬる人の心もはかりしぬと　山月記
うらみこまたること　むさぼる死する事をなぎさるこ

曾根好忠　初出　題一　月しらず

由良の門を　ゆらのとハ水門のこ
わたる舟人かぢをたえ　ゆくへも知ぬ恋の
道かな　ちとなくなせしこと人ら梶をとうしかひ
漕ともゆくへなくなるこのつゞくるそ　はしる
道かなと　一首の意をいふ　ゆくへも知ぬ恋
とあまりの人がつれなきをなやむ世なれば恋れるとなく

恵慶法師　拾遺　恋

八重葎　むぐらがくき　九重　人の来ぬ
宿の字まてしてしてるゞ　荒れる宿は淋しきに人こと尺
我をとも　一首は宿をいふ　人の来ぬ宿
もなくしだりて行よ八重なる葎はあまてる宿は淋
しきに人のたづねもこえねさをの花へも葎　来ぬ
宿

源重之　詞花　恋上

風をいたみ　風がつよ　岩うつ波の　二句序　岩をうつ
おのれのみくだけて　おのれのみくだけて　物を思ふ
人しくだけて　物を思ふ人を行ると物思ふ
人をいふ　一首は人を行ると物思ふ
人しくだけて物を思ふ

大中臣能宣朝臣　詞花　恋　題しらず

御垣守衛士のたく火は夜はもえて昼は消えつゝ物をこそおもへ

首の心は夜はもえ昼はきえつゝ物を思ふ身をたとへたる也

入るかやうにおもひしめりて物をおもふと也

藤原義孝　後拾遺　恋二

女のもとよりかへりてつかはしける

君がためおしからざりし命さへながくもがなとおもひけるかな

一首の心は君がためにはおしからぬ命なれど逢ての後は長くもがなと思ふ心也

藤原実方朝臣　後拾遺　恋一

女にはじめてつかはしける

かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思ひを

一首の心はせめてかくとだに

いふかひなきことをえいふ事うちしさへえいとぼよるるは也絶のも
ゆうつなる物なれどとさうとも又ちるまいるといへるこ

後鳥羽院御製　拾遺恋二

みのもとに雪しかつもる日ふへ
ふてはいかにかるるかとも又雪
雪女のりしへとてつらいしるこ

思ぬをいかてかしるとはいはんとは
めしき朝ぎりの空　俗はやつはりと
いふまわるる　一首のこゝハ恋のわれしやそれ

也と又ふてはりて重しとくたつてゐなるまはりわるうてのこ
とうしの恋しのよつくとり朝ぎりの空わしきこと

右大将道綱母　拾遺恋四

入さ撫ぬまよりうつる月かうかの
門ぬけそくはるしとつくしぬ　俗はさそ撫ぬ
いなものこ

てしまいをあをぬきこと　俗ハなをなをておしいる　門ぬけ
ことをいいい入ぬこ　なのりきつくなるきこ　ひとりぬる夜のあくるまを　ハの字ハ門とあ
なること　俗はなをなを　ふるあくるひとりきゐとハ志る　ハの字ハそくそ
一首のこハふるる門の戸をとわるるとを立てつ夜とのるふが
まちくしこまひを水のうハぬしをなをなをきなをる秋霧をを夜
のあくるまをとをしなをいはとをりひをふをんこ

儀同三司母　新古今恋二

中関白うちをしをわるる
とををまこしし　ひとをれをしを河のこ　俗ハ炎絶　ハ未　まを
を西をりてハ有　ぐをきをなれこ

ふを限の命をとうなを　一首ハを今ハをうを
ふをまをしををくををの色りでををりよくい

[illegible]

大納言公任　千載雜上　嵯峨の大覺寺にまうでて人々

歌よみ侍りしに侍りける

滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れて

なほ聞こえけれ　流布して世上に名を流す　滝の跡の石

きこゆる滝の跡のこと

一首のこゝろは大覺寺に詣でゝ滝殿のあとを見て

今でこそ絶えて久しくなりぬれど世上に名高きわが滝の音は

名のみ流れてなほ聞こえけれ　滝の音は絶えぬれども

和泉式部　拾遺雜上　心地いたく侵ぶりて人

[illegible]

あくがれいでにしわが魂

あるものとのみ思ひ侍りしに　世上の人の言ふ

なりけるかな　世にあるものとのみ思ひしに

なりけるかなの意

思ひきや

[illegible]

前のこゝろは病氣が段々重くなりて世上にあるものとのみ思ひしに

世にあるものとはなりてなほ命のあるまゝに

あるこゝろなり

[illegible]

和泉式部　新古今雜上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

途中でありしかのうせ　俗よりとぶらふ

[illegible]

月おきかねて物をこそ思へ

[illegible]

めぐりあひて見しやそれとも分かぬまに雲がくれにしよはの月かな　紫式部

一首のこゝろは雅なる人とめぐりあひて見しかとも分かぬうちに月かくれぬるなり

大貳三位　後拾遺　恋二

有馬山ゐなの笹原風ふけばいでそよ人を忘れやする　一首のこゝろは有馬山ゐなの笹原風ふけばいでそよ人を忘れやするとよめる歌なり

なでさアそれは山深遠なるあれどこなたより人を忘れぬ事なりとよめる歌なり

赤染衛門　後拾遺　恋二

やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな　一首のこゝろは

やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな

たのまれぬ女の心を思ひ侍りて女のもとにまかりとしてよめる

てこなりの女のもとにて

やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな　一首のこゝ

ろは

やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな　一首のこゝ

ろは

やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな　一首のこゝ

ろは

小式部内侍　金葉 雜上

和泉式部　小式部ノ母なり

保昌に　和泉式部ノ夫

ぐして　ほいの天くに

丹後に　丹後ハ国名なり

ありける頃　ひさしくなりて

小式部内侍　小式部ノ内侍

をよこせたりけるを　内侍の文の

ことばをとりて　十ばかりなる

ことよ　小式部ノ内侍

いまだ

行かぬ　内侍の文に

ことよ　小式部ノ内侍

行かぬ　内侍の文に

中納言定頼　定頼ハ公任の子

きこえ　内侍ノ文ニ

かけ　内侍の文に

ける　内侍の文に

人をつかはしたりけるに　定頼ハ公任の子

人をつかはしたりけるに　定頼ハ公任の子

いかに　内侍の文に

丹後へ　丹後ハ国名なり

人はもう　定頼ハ公任の子

丹後の道は　丹後ハ国名なり

遠きか　丹後ハ国名なり

近きか　丹後ハ国名なり

とて　内侍の文に

問ひ　内侍の文に

かけて　内侍の文に

ける　内侍の文に

大江山　丹後ハ国名なり

いくの　丹後ハ国名なり

道　丹後ハ国名なり

遠　丹後ハ国名なり

天の橋立　丹後ハ国名なり

人も　丹後ハ国名なり

踏みも見ず　丹後ハ国名なり

ふみ　丹後ハ国名なり

天の橋立　丹後ハ国名なり

一首のこと　内侍の文に

小式部とて　内侍の文に

内侍の文に　内侍の文に

丹後に　丹後ハ国名なり

ありける　内侍の文に

頃　内侍の文に

ひさしくなりて　内侍の文に

丹後へつかはしける　丹後ハ国名なり

使　丹後ハ国名なり

ありけるを

[illegible]

清少納言　拾遺雜二

大納言行成卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

法とことにあらしまとしはいとなつかしうおもひ入山ぢて死なんとの
思ふ人もなかりしかば　一首のこゝろは人しなかりしかば
しかるに我はかりこゝにもあるとも人はなつかしい花よ
よろづ代経る山ぢて何一つ足なれ過ぬるもとゝ月ちらづきといふ
心をなくるなりとこゝ

周防内侍　千載雜一

きぬぎぬはなりぬ月わるき夜二條院
にて人々あまたゐるわりて物語をしたるに
周防内侍よりかうして　今撰集にふるのるて　枕もう
なとゝ心のひとつふときゝて大納言忠家のまとに枕
ものとりてうしなかれ蔵のとりに入て侍りしとよ侍る

春の夜はなほ長き夜はなほ長きとはいかなる時とかうしてこゝ名ゝ
ふるしなる　一首のこゝろは春の夜はなほ長きとはいかなる時とかうしてこゝ名ゝ
ふるしなる

三條院　後拾遺雜上

月をしたがしてしかしてしかしてしかして　後冷泉
月のあるとこゝろ
心をとゝめて　後冷泉

世はなほ人へも　後冷泉

秋の月うか　一首のこゝろ
世の花はなほ人へ世はなほ人へ

しるのかよとしかぞくてかしもたバ又月とらんなとうまもあるべき
かなどは後学とすべきなり　なをあらためて他の事も拙なのかつる事なれとわろし
大内てゝ又〜月新八とよしの事とゝはおて意さをうんとゝ

従四位下前大納言藤原公任

わたし守みむろの山のもみ紅葉ちるかの川の錦なるらん

一首のこゝろハ三室山ハ紅葉よわたしもりしぶてらゝせ来ハ竜田川ハ流れ
おてかしきとゝ詠るとゝ

従五位下前中務大輔藤原定頼

ちはやふるさゝ波とゝおてなかるゝ川の錦の名書

一首のこゝろ千はやふるさゝ波ハ宿と云おてんなくけしきもあ

らくらとてあなたこなたとなびけるをいつくも川の錦の名ハ
はやふるさゝなと云

大納言經信　後拾遺　師賢朝臣　桜津の山ハ人
くしてゝ四家妹風といへる事とあるを
夕ぜれハ門田の稲の葉をとをしてあしの葉ハ
小夜の風ハとつまりもひるもなくこゝろ一首すきてゝきと一首ふきとゝ
風ハ一ふくとゝ風なくとゝ風とゝ
うなるとふくとゝ　一首のこゝろ門田の稲の葉ハ風のあるとゝ
ようふかうとゝ　なのちくべ優とゝ

従三位藤原俊成　後拾遺　師賢朝臣　歌合よしあるを
忘れぬるとゝ　一首とゝ
忘れぬるとゝ　一首とゝ
忘れぬるとゝ　一首とゝ

のあるなれハ　ふんのうりまきしあぢ　このくぢや　ゆうとうくしとく　俗名よ
ゆうとびすぶまいとのかきこ
神のゆるしもしらぬなれ　神ぢのぬまてゝも忘れぬるゝ　なみさのすゝ　一首の
うそぶも神のゆるしも　流の藻の
きゝ世上でん流いあどゝしいしゝ　無判もる人よ源ハ藻ハいゝ　ゝ法て
はゝとゝてゝゝゝもゝきぬゝ

権中納言定頼

長秀遠　長上

てんゝ間ゝゝへて　寄ゝ　伝名て遠よ山の法て
をゝゝゝいふゝゝとゝ
言葉の風上ゝ　山のてゝきをゝふ　尾先のゝとゝふゝゝ　長ゝ　法ゝ　ゝ
山ゝ　さゝゝゝの流ゝ　尾ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　一首のを
ゝゝゝゝまゝゝ　絶き山とゝ　ゝ
山のいゝきゝゝ山ゝゝ法ゝゝ流おとゝ　そのゝゝまゝゝ　ひゝき山

よゝすゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝ

後鳥羽院　千載雜上

[illegible]

法性寺入道前太政大臣　[illegible]

[illegible]

又その年もとしもくれはてつゝ　[illegible]

[illegible]

[illegible]

法性寺入道前太政大臣　俗名藤原忠通　[illegible]

[illegible]

崇徳院　[illegible]

瀬をはやみ　[illegible]

[illegible]

てもとゝふまでしらで偽はらうなゝ
雅成親王　雅成はもとゝふとよめり

一首の意は今てをゝよ人の思ふねをまこと名ゆゑにいはれて

源氏物語　金葉　関路の雪

あとゝゝ消あとゝゝ行ふゝ山ゝ
ねはゝゝ雪ゝ雪ゝ関ゝ

一首の意は雪

左京大夫顕輔　崇徳院御位の時歌上

秋風にたなびく雲のたえまより
もれいでゝる月の影かな

一首の意は今

待賢門院堀川　百首の時恋の心とあり

なすらへむ髪の間　なすらへむ髪の間
髪のみだれて　髪のみだれて
たれかはとして

一首の意は人をもてなすべきやうなし

なんぞうりあるもかりもたりがごとくおぼしさまつけてもあるまじくとなんとなくしてわとなりとふゝ

後徳大寺左大臣　実定

郭公なほのこりなくなのるかな
月やあらぬ春やむかしの

一首の意は郭公よ名のるかなと

押あてゝ月やあらぬ春やむかしの月ぞとよ
よ人ゝ

一首の意は郭公よ名のるかなの月ぞとよ

道因法師　千載　恋三

思ひわびさてもいのちはあるものを　憂きに堪へぬは涙なりけり

[illegible]

皇太后宮大夫俊成　千載　雜中

述懐百首の中よりえらび侍

世の中よ道にまよふ人ごとに　[illegible]　山の奥にも鹿ぞなくなる

[illegible]

がない世とのがれて山の奥へ入ると一途に思ひ定めたるその山の奥でも鹿が鳴いてゐるよ一二の句のつづきは述懐のあまりは思ひもよらぬ耳よりなりてきこゆ

藤原定家朝臣　新古今　雜下

来ずして待つ夜の更くるまでの心は一途に恋しきに

一夜だにかよはぬ夜ふけの人を待つ夜は世をうらむるなりけり

又恋しく思ひ入るをわがかくもあきぬ恋ぞ世をうらむる

[illegible]

後鳥羽法皇　千載　恋三

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人かつれなさに秋もすゝ[illegible]

あさもよで人かつれなきのゝ[illegible]

西行法師　千載　恋

なかめてゝ月やはものをする月かはものをするこゝろ[illegible]

めづらしう[illegible]

[illegible]

一首のこゝろ[illegible]

うさこそ[illegible]

[illegible]

寂蓮法師　新古今　恋下

村雨の露もまだひぬまきの葉に霧たちのぼる秋の夕暮

一首のこゝろ[illegible]

皇嘉門院別当　千載　恋三　拾遺愚草合の時の家の歌合よ

旅宿よりあふ恋といへるこゝろをよめる

難波江の芦のかりねの一よゆゑ身をつくしてやあはんとおもふ

一夜ゝ[illegible]

[illegible]

難波江[illegible]

[illegible]

恋とゝ[illegible]

[illegible]

一首のこゝろ[illegible]

[illegible]

式子内親王　新古今　恋一

百首歌たてまつりし中に恋恋

玉の緒よ　おとつ〜ぬきうる玉へ　命の事　よたえてよめり　たえなばたえね　なほ
ながらへば　しのぶる事の　よわりもぞする　玉の緒の　ながくへ　たゆまへ　たえなば
たえね　なほ　ながらへば　しのぶる事の　よわりもぞする　玉の緒の縁の詞

たのむの雁　世の中　人は　かりの世　なれば　たのむの雁　世の中　人は　かりの世　なれば

月　雁　なれば　かりの世　なれば　一首のこゝろ　我命よ　今はかぎりの　世なれば
なれば　なれば　なれば　なれば　なれば　なれば　なれば　なれば　なれば

ぬるなかぐいつと死もせよ　しのぶる事の　よわりもぞする　たのむの雁　世の中　人は　かりの世　なれば

よもうてをこよいづるもはるの雁きたるこゝ

殷富門院大輔　千載　恋二

歌合し侍りける時　恋の所にて

女せばやなとうら風の　袖ふるはるの　夕暮れ

これらもこゝに　きたるなり　恋　一首のこゝろ　うらかぜ　袖ふる　夕暮れ

はつかしきこゝろ　はつかしきこゝろ　はつかしきこゝろ　はつかしきこゝろ

ねるものゝ我袖ぬれしいくしほなりて　夢の間を

こゝろ　こゝろ　こゝろ　こゝろ　こゝろ　こゝろ　こゝろ　こゝろ　こゝろ

人は見せばやとこゝ

後京極摂政太政大臣　初度百首歌　寄月恋

きりぎりす　なくしもよわる　秋の夜の　月かたぶくまで　ふけぬるかな

きりぎりす　なくしもよわる　秋の夜の　月かたぶくまで　ふけぬるかな

やの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

月　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

首のこゝ　孔雀きゝ　嘉吹よきこゝ　きりぎりす　なくしもよわる　秋の夜の　月かたぶくまで　ふけぬるかな

のうちもやうう　落ちなんば　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字　ひさしくの字

ねるまもうれいとひさしきまもとこゝ

二條院讃岐　千載　恋二　寄石恋

我袖は波千よりの人をのね神の石の結ぶてをとし人
こうもくねん（波千よりもわるくなる石の結ぶてをとし人のしらべきよし）
を我袖は波千よりも尺えぬ神の石のそこそこのひらをの
人をもとゝ深どとゝくくに時はなしとゝ

鎌倉右大臣（源実朝 覊旅類）

世の中は常にもがもなぎさこぐあまの小舟の綱でかなしも

（世の中は常にもがもなぎさこぐあまの小舟の綱でかなしも）

を世の中は常にもがもなぎさこぐあまの小舟の綱でかなしも（なぎさこぐあまの小舟の綱でかなしもの）

あまとゝ山海の浦の磯ゝこきてゝるあまの小舟の綱でかなしも

引が陳よりゝ今はなど長生をして又もまて人をゝしとなの

拾歌いくれ浦ともなどいかなる石の塩
海のうゝくゝ松のつゝてゝもとゝ寄てゝそのゝ
よつきて遠ゝまれ浦の半ゝすゝ覊旅集より入
ゝるも拾ゆゝ

恭義雅經（新古今 雅経）

春ゝ山の霞ゝ

春ゝ山の霞ゝ（春ゝ山の霞ゝ）

春ゝ山の霞ゝ（春ゝ山の霞ゝ）

なつて宮こなり陽ろこ成ぬ春ハ花おとなりなる夏てハいのて風の
月すし心ハ秋ハ秋ハ冬ハ雪夜ふつとハいて宮こ成ぬ春ハ陽ろこ成ぬ
さくハ氣韻(こゝろ)ハ秋ハてこけもこ森情も深きこ

前大僧正慈圓　千載　雜中

おほけなくうき世の民におほふかな わが立そふ墨染の袖

大僧正慈圓　大僧正慈圓ハ天台宗の僧ハ慈圓ハ藤原氏ハ摂政ハ関白ハ藤原忠通ハ子ハ慈圓ハ
九歳ハ出家ハ慈圓ハ天台宗ハ僧ハ慈圓ハ天台宗ハ僧ハ慈圓ハ天台宗ハ僧

[illegible]

権中納言定家　新勅撰恋三

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ

海辺にすまいする人をまつほの浦の夕なぎに焼くやの字きれ　藻塩の身もこがれつつ　藻塩とは海藻の名

建保六年内裏歌合

まつほの浦とは海辺の名なり　夕なぎとは海の面平なるを夕なぎとよめり　焼くやの字きれ　藻塩の身もこがれつつ　藻塩とは海藻の名　身もこがれつつとは海藻を焼くとて身もこがれつつ

従二位家隆　新勅撰　夏

風そよぐ楢の小川の夕暮れは御禊ぞ夏の印なりける

風そよぐ楢の小川の夕暮れは　楢の木の生てある事を水名によみてもよせうり　御禊ぞ夏の印なりける　上の句よりしきりに夏の事をいとなむ心なり　夏の印とは夏の事をいとなむ心なり

権中納言定家　新勅撰元年女院入内の屏風歌

[illegible]

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ

[illegible]

従二位家隆

風そよぐ楢の小川の夕暮れは御禊ぞ夏の印なりける

[illegible]

[illegible]

後鳥羽院　後鳥羽院御歌中

人もをしし人もうらめしあぢきなく世をおもふゆゑに物思ふ身は

[illegible]

天下の政法[illegible]世の中あぢきなくやはつかてをしく

[illegible]心をそなきてあとをとどめばやとおもふ[illegible]

であるこゝろをしらぬ人もあるこゝろ[illegible]

[illegible]

順徳院　後鳥羽院御歌中

百敷や古き軒端のしのぶにも猶あまりある昔なりけり

[illegible]

[illegible]

一首の意内裏の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百人一首をうきいやきとくとくとすなはちさきのよ
さくらばなちれて清しをうもはらひて酒のさとを解之じ
歌よみいそしひわとせしまとといふ夜あまて物語まをひはんえ
ちをうしはしはらくひをはらひあまをしきはらくはるを行れの秋
ねとをいわまとをはきはいしはけるをちていふひなくゆれのハ
うはれをいはてをうをる事のをかりをを奥沖はれ
設歌抄賀茂真淵うをぬまなひをいふ西をん大をはをう
しををまて紫中いをるきをとつをめて教をしをすを潤ををはをを
るてをりをしいをやをを名やひをるををと系と今はをの事語を
かをきををていをををきをうをねをまをのの後ををんをて今をを西ををる
をりを名はをはををを紙背の系圖ををもいをるをいをらをいを

へをれを事はををくをれをををををりををををををををををををををををををを
色をれををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををを抄をををををををををををををををををををををををををををををををを
れをををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををををを
のをををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををををを
弘賢ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををををを
のをををををををををををををををををををををををををををををををををを

幸ひ[illegible]ふうき改めたかうさしやいすしへ今ふう
やまとよりてためしなくめてこき世まよりあのてかう兵
はらりおこそとれてはのうさてようこうたのしこかるうた中
ホ初ますかしはしたをみてらくかうて世文門の化よりもこ
とすうらいふうしはよ

享和四年甲子四月

石原陸奥守正明

清輔女年中用文蒙（和歌流派系図書先生書）	全壱冊	附書
女用文宝鑑（九条流多有為）	既出続入 全壱冊	釋花百人一首 女子用入 全壱冊
仝 小倉秘（既出続入 中本）	全壱冊	仝 梅花百人一首 全壱冊
女古状揃（既出女教訓入）	全壱冊	小倉百人一首（四季文案入） 既出続入 全壱冊
女今川操鑑（既出賢女鑑入）	全壱冊	自撰奇 続入 全二冊
女消息往来（右仮名付）	全壱冊	伊勢物語 全二冊
		俳諧四季名寄（宮井家山崎 名所入 十孫本） 全壱冊

書林

江戸日本橋通壱町目

須原屋茂兵衛